

カという日本と最も重要な関係にある国は、中南米諸国との間で、上に述べたような複雑かつ困難な状況を反映した関係にある。このようにみると

き、日本とアメリカの関係を考える際にも、アメリカと中南米の関係を視野の内に入れて考える必要があることがわかるのである。

ピラニアの骨までしゃぶった話

岡田 久美子

中流マナウスの上空から見たアマゾン川は、セルバの中に夥しい水が、ただワッと無秩序に拡がっているばかりだった。その昔、地形学の講義から得た「河川」の概念には、確か「川岸」というものがあって、水と陸とは一線が画されている筈であるのに、こゝには……それが無い。

世界中の河川流量の20%近くという、驚くべき水量を有するこの川は、また実に多種多様の生物をその懐に抱いている。例えば動物では、大は巨大魚ピラルクー、孳猛なクロコダイルに大蛇アナコンダ、小は水辺で幻想的な点滅を繰り返す無数の蛍まで。そしてあの殺し屋ピラニアも、その一員である。先年、私はピラニアの中でも特に狂暴の誉れ高いナツテリと、こゝアマゾンで親しく対面する機会を得た。

ゴム景気の衰退による凋落後、半世紀を経てフリーポートとして蘇ったマナウス。その港を離れた定員30人のクルーズ船は、古びてはいるが各キャビンにシャワー・トイレ付き（但、その水は直接川から供される）。しかもこの時は12人の乗客に対して、ガイド、クルー、コック、ボーイ等が総勢10人という贅沢さ。更にモーターボートを2隻牽引しており、ジャカレー（大鬼蓮）を見に行ったり、夜中に鱔狩りに出掛けたり、小さなゴム園を訪問したりと、スピードと小廻りが要求される時には、これに分乗することとなる。

ピラニア釣りの場合もまた然りで、ボートはパピルスに似た水草の茂る、細い水路の奥へと進む。水は茶色に濁って、川の中の様子は我々には皆目分らない。釣竿は、細い木の枝の先に糸と鉤を結びつけたただけのごく簡単なもの。餌は小さく切った牛肉を使う。そしてこゝでも既得の「釣」の常識はひっくり返された。先ず釣竿で、水面を思いつきパシャパシャ叩くのだそう。つまり、

好戦的なピラニアを吏に挑発するわけ。当りが来た時の竿の上げ方も要領が違わらしく、以前に鮎釣りの名人なる人が満を持して糸を垂れたが、獲物はゼロであった由。

南緯3度、青く広い空の下、真昼の静寂——と、セアレンセ（インディオとオランダ人の混血）の船頭が、早速最初の1匹を釣り上げた。油壺の熱帯魚水槽で見たのとは違って、腹部の朱赤の彩りや金色の紋様がパッと鮮やかだ。体長も20cmを優に越えようか。さて、我々とはといえば、ツンと来た手応えでサッと上げているつもりなのに、いつも餌だけがきれいに無くなっている。それも、脂身部分は残して行くという芸の細かさ。感心ばかりしていないで、せめて1匹なりとと念じていると、グイと強い引き。今度こそはと掬うように竿を上げると、かかった！ 晶目もあろうが、大きい。しかし怖くて鉤から外せない。下手をすれば、指の1本ぐらいブラブラにされてしまうだろう。つくづく顔を眺めて新発見、ピラニアはひどい受け口なのだ。下顎が特に発達して大きく突き出し、その上にズラリと並んだ尖った歯、歯……。血の匂いを嗅ぎつければ、寄ってたかってむしゃぶりつき、遂に白骨にする迄は攻撃の手を緩めないという、あの歯だ。結局、このあと餌の牛肉を相当量振舞い、1時間ほどの間に1行6名で釣れたのはたった2匹。ガイドと船頭は2人でその数倍を、既に船底の箱に入れている。

本船へ戻ると、早速メスチゾのコックが皆の期待をこめた注目の中で、包丁捌きよろしく調理にかゝる。先ずは刺し身。醬油やチューブ入り山葵も先刻整えてある。白身であっさり、という印象で、幾らでも食べられそう。ライムを搾り、更に卵白を加えたピンガ（甘庶から作ったアルコール度の高い地酒）や、主食となるタピカオを炒めた

ものともよく合う。次に空揚げ。姿のままの登場なので、眼も口もガッと開いて、歯がそっくり剥き出しである。おそろおそろかぶりつく。パラグリの実の油が淡泊さを程よく補い、少量のピメントとアンデスの岩塩が、この魚の香りを引き立たせている。はじめの及び腰はどこへやら、いつの間にか2匹目に手が伸びて行く。

それにしても、船の甲板で川風に吹かれ乍ら、

ピラニアの頭と尻尾を持って齧っていたあの時、突然「あ、今、まさしく私はアマゾンに居る！」と強い感動を覚えたのは何故だったのだろうか。

この時のピラニアの下顎は、カラカラの干物となって、しかしあの歯だけは飽く迄鋭く、今も機の抽出の中でその存在を主張している。

(3回生)

とってもシャイで実はひょうきん

松本圭子

記念すべき浅海先生の退官記念号にこんな不謹慎なことを書くとは何事かと、諸先生、諸先輩方にお叱りを受けることを覚悟の上、この原稿を書かせて頂きます。

私は2年の時に地質学の授業を受けて以来、マスターを卒業するまで、いえ今日にいたるまで浅海先生には大変お世話になってまいりました。初めに受けたとっつきにくい印象と随分異なり、実は先生は余りにもシャイなために相当他人様に誤解を受けているということが間もなくわかってきたのです。

確かあれは4年の卒論で慌ただしい頃のことです。私のクラスのとある学生が、私にこう言いました。

「入学してもう4年目なのに、浅海先生は私のことを地理学科の学生とわからないらしくて。」彼女はエレベーターの中で先生と2人になった時大きな声で挨拶したのに無視されると私に主張するのです。するとそこにいた何人かのクラスメートも、自分も同様の経験があるとか言い出しました。先生にそのことを聞いた私が聞いた回答(釈明?)はこのようなものでした。

「エレベーターで女性と二人になったら恥ずかしくて顔が見られないじゃない。」

いったい何年女子大に勤めておられるんですかと口から出かかったのですが、浅海ゼミの一員としての任務はクラスメート達の誤解?をとくことと悟った私は、早速説明会を開いたのでした。

学部卒業の謝恩会の時の先生の姿も忘れられま

せん。すっかり誤解のとけた先生は、一度でいいからハイヒールを履いてみたかったとおっしゃって、誰かのハイヒールを借りて記念撮影をしているのです。上月使いでちんまり収まっていられる先生の写真を見ると今でも笑いが込み上げてきます。(先生にはアルコールが入っていたことを申しそえます。)

私の卒論、修論のフィールドである甲府には、何度もご足労いただきました。ブドウの調査をしていたのでブドウ畑をずいぶん歩きまわったのですが、一目をしのんで失敬したブドウを口に入れたら酸っぱすぎて思わず吐き出した先生の顔も忘れられません。

大学院時代には偶然先生のお宅から徒歩5分の所に下宿していたので、時々お邪魔させていただきピアノをお借りしたり、夕飯をごちそうになったり本当に良くしていただきました。先生にはとてもかわいい(目上の方に使う表現ではないことは承知しているのですが敢て使います)優しい素敵な奥様がいらっしゃいまして、このお二人を見ていると思わず「いいなあ。」と口に出てしまうような雰囲気は浅海家にはありました。応接間にたくさんのぬいぐるみが置いてあり、先生のイメージとちょっと違ったので(今は納得してはいますが)初めてお邪魔したときは驚きました。お誕生日にひょうきんな顔をした黒ネコのぬいぐるみをゼミでプレゼントしましたところ、意外とサービス精神旺盛の先生は、「こういうのが欲しかったんだ。ありがとう。」と